

青年期の愛着スタイルからみた恋愛におけるロマンチック希求度の検討 — ロマンチック希求尺度の作成を通して —

Examination of the Relationship Between Adolescent Attachment and the Degree of Longing for Romantic Love: Development of a Longing for Romantic Love Scale

田坂 麻紘 TASAKA, Mahiro

小松 由樹子 KOMATSU, Yukiko

武井 友希 TAKEI, Yuki

● 国際基督教大学教養学部
College of Liberal Arts, International Christian University

槻館 尚武 TSUKIDATE, Naotake

● 国際基督教大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, International Christian University



愛着, ロマンチック希求, 青年期

attachment, longing for romantic love, adolescence

ABSTRACT

本研究は、理想の恋愛に対する期待を反映するロマンチック希求という観点から青年期の愛着と恋愛との関係の検討を試みた。研究1では、ロマンチック希求尺度を作成し、研究2では、大学生を対象に、研究1で作成したロマンチック希求尺度を用いて愛着との関係を検討した。研究1より、ロマンチック希求尺度は、全10項目2因子の構造であり、一定の妥当性と信頼性のあることが示された。この尺度を使用し、愛着スタイルとの関係を検討した研究2では、先行研究より、とらわれ型、安定型、恐れ型、

拒絶型の順にロマンチック希求度が高くなると予想したが、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順であることが示された。これらの結果から、恋愛における行動と希求は必ずしも一致しないという可能性が示唆された。また、希求に関しては親密性の回避よりも見捨てられ不安の影響が強い可能性が示唆された。

The present study examined the expectation toward an ideal type of love in terms of the relationship between attachment style and love in adolescence. The purpose of Study 1 was to develop the “Longing for Romantic Love Scale”, and in Study 2, the relationship of expectation for love and attachment style was investigated based on the scale developed in Study 1. From the result of Study 1, the “Longing for Romantic Love Scale” consisted of 10 items loading under two factors, and the reliability and validity of the scale met acceptable standard. Although it was expected in Study 2 that the degree of longing for love would be highest for the preoccupied attachment style followed by the secure, fearful, and dismissing attachment styles, respectively, the data revealed that the degree of longing for love was highest for the fearful attachment style followed by the preoccupied, dismissing, and secure attachment styles in that order. Thus, it is suggested that a person’s expectations toward ideal love and romantic behavior are not always consistent with one another. In addition, in terms of the expectation for love, it seems that the influence of ‘the model of anxiety’ is stronger than ‘the model of avoidance.’

1. はじめに

近年、DVや虐待の認知件数が年々増加するといった子どもと親との情緒的な絆の大切さを再確認させられる出来事が増えつつある。そのような絆は、他者との関係を築く礎となり、その後の人生を通して、親密な他者との間にも同様の絆が築かれていく。乳幼児が養育者という特定の対象に対して、信頼や親密といった特別の感情を抱くことで形成される心理的絆のことを愛着と呼び（安藤・遠藤，2005；Reber, Allen, & Reber, 2009），この概念はBowlbyが1969年に提唱した理論に端を発する。Bowlby（1973）は乳幼児と愛着対象との関係、経験の種類に基づき、その表象が内在化されるとし、愛着は、その後も乳幼児期の母親のように、その人にとって重要となる人間関係においても形成されることを示唆していた（Bowlby, 1969, 1982；Ainsworth, 1989）。乳幼児の愛着に焦点をあてた初期の研究から、1980年半ばにその研究対象はより年長の子どもや成人に広がりを見せ、現在、愛着理論は生涯発達の理論とされている（Crowell, Fraley, & Shaver, 2008）。

本研究では特に青年期の恋愛と愛着に関して検

討を行った。青年期は、子供から大人へと成長する過渡期に位置し、加えてこれから家族というものを形成していくための準備期間にあたる。そのため、青年期の愛着が人間関係に与える影響を明らかにすることは、他の時期を含めて、愛着が人間関係に与える影響を考える上でも欠かせない。また、恋愛は青年期の重要な興味の対象でもあるため、愛着と恋愛の関係を明らかにすることで、青年期をより理解することができると考えられる。しかしながら、恋愛と愛着の関係に関しては、いまだ解明されていない点が多く存在しており（金政・大坊，2003）、さらなる研究が必要とされているといえる。

そこで本研究では、恋愛対象に対する行動というよりも理想の恋愛に対する期待を反映するロマンチック希求という観点から青年期の愛着と恋愛との関係の検討を試みる。

愛着スタイルは内的作業モデルを一般他者への信念や期待という形で表出させ、それに基づいて対人関係が形成されると考えられている（金政・大坊，2003；Bowlby, 1973）。これまで多くの研究が愛着スタイルに基づく対人関係の形成として青年期の恋愛関係を取り上げており、個人の有する

愛着スタイルが恋愛関係のあり方にも影響を及ぼしていることを示唆している (Feeney, 2008 ; 金政・大坊, 2003)。しかし, 先行研究で検討されている恋愛関係の指標は, その多くが実際の恋愛行動に焦点を置いたものであり, そこで測定される関係のあり方は個人の立場や資源などといった現実的な制約が加味されたものである。恋愛や恋愛相手への期待は恋愛関係の性質に影響を与えるものであり, 実際の恋愛行動よりも個人の形成した内的作業モデルをより反映する指標であると考えられる。

また, 恋愛行動に基づいた指標では, 基本的に恋愛における肯定的な側面にのみ焦点をあてている (神薙・黒川・坂田, 1996)。本研究では, 恋愛に対する否定的な側面も含んだ期待として定義される, 恋愛に求めるロマンチックさを測定することで, 恐れ型や拒否型といったネガティブな愛着スタイルと青年期の恋愛関係との関連をより精緻に検討することを試みた。

本稿では, まず愛着とそれに関連した恋愛に関する先行研究を概観し, 研究1としてロマンチック希求尺度作成の試みを, 研究2として大学生を対象に, 作成されたロマンチック希求尺度を用いて愛着との関係を検討する。

成人の愛着

成人においても親密な他者に対する愛着が見られるということは, Bowlby (1973) 自身も示唆していた。成人の愛着には大きく2つの考え方があり。1つは乳幼児期に養育者との間で形成された愛着は, 成人期においても養育者との間に見られるとするものである (Main & Goldwyn, 1988)。もう1つの考え方は, 乳幼児期に形成された愛着は内在化され, 成人期においては養育者との間だけでなく, あらゆる対人関係においても影響がみられるとするものである (Hazan & Shaver, 1987)。

この後者の考え方の基礎となるものが, 内的作業モデルである。内的作業モデルとは心的表象の1つで, 乳幼児期に母子関係において形成された愛着が内在化して形成されたものであり, 自己や一般他者への信念や期待という形で間接的に表

出される。心的表象であるため, 直接観察不可能な理論上の考えである。現在では, 意識的認知や行動, さらに感情的側面を含んだ複雑で多次元的な構造として考えられている (Collins, Guichard, Ford, & Feeney, 2004)。この内的作業を説明するために様々な理論が提唱されたが, 特に関係性を重視した内的作業モデルに関する理論としては, Baldwin (1992) の関係性スキーマが存在する。関係性スキーマとは, 社会的認知研究の中で提唱された理論であり, 対人関係そのものを表象する認知構造である (Baldwin, 1992)。Baldwin (1992) は, 自己と他者は独立に表象されるものではなく, その関係性自体が1つの統合されたスキーマとして表象されるとしており, 人は重要な他者との関係性についてのスキーマを参照しながら, 現実の対人関係を経験していると論じている。こういった内的作業モデルを仮定することで, 親密な対人関係であれば, そこに愛着がみられるとする成人愛着スタイル研究が生まれた (金政, 2003)。

成人愛着スタイルとは, 主に乳幼児期の母子関係においてそのベースが形成され, 愛着の継続可能性を提供する内的作業モデルの作用によって, その初期モデルにある程度沿った形で発達していく, 個人の認知する自己および他者への信念や期待のこと, と定義されている (金政, 2003)。つまり成人愛着モデルは内的作業モデルを内包したモデルであるといえる。そして個人は内的作業モデルに関連するような期待を持ち, その期待を自己成就させる傾向があるといわれている (Feeney, Noller & Roberts, 2000)。Bowlby (1973) によれば, 内的作業モデルは早期の愛着関係での具体的な相互作用の経験を通して形成され, 変容可能性は, 年齢とともに減少していく。しかし, 人生や人間関係の重要な転機における個人の社会的役割の変化や, 恋愛等の対人関係の変化は, 成人の愛着スタイルを変容させるのに意味を持つともいわれている (Bartholomew & Horowitz, 1991; Feeney et al., 2000)。

愛着スタイル

愛着に関する理論的な起源は動物行動学に基礎

をとおした Bowlby の愛着理論にあるが、後続の研究の基礎となった、愛着のスタイルの分類という実証的研究の起源は、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) のストレンジ・シチュエーション法 (strange situation procedure : 以下 SSP) にある (Solomon & Geroge, 2008)。SSP とは主に言語発達がまだ十分でない時期の乳幼児を対象に、彼らにとってストレスとなる初めて遭遇する環境での情緒的な反応を評価する手法である。ここでの愛着とは養育者 (この場合は母親) との間に形成された信頼関係の度合いに基づいた行動や感情を表出させるものと言えるであろう。

SSP により Ainsworth et al. (1978) は、乳幼児の愛着の個人差や安全基地としての母親の役割についての実証的研究を行い、その結果から乳幼児は大きく A・B・C の 3 つの愛着スタイルをもつことを示した。

A 群は回避群といい、母親が部屋を出て行っても全く悲しみのサインを示さず、母親が戻ってきても嬉しそうな様子を示さない。また母親への接近や接触を求めようとしないばかりでなく、母親が接近や接触を求めると、それを回避しようとする特徴がある。

B 群は安定群といい、見知らぬ場所にもかかわらず、母親がいることで安心し、活発な探索行動をする。母親が退室すると悲しみのサインを示し、探索行動も低下するが、母親が戻ってくると、盛んに歓迎行動を示し、すぐに活発な探索に戻るといった特徴がある。この群が一般的に健康的な愛着とみなされる。

最後に C 群はアンビバレント群と呼ばれ、母親との分離に激しい不安を示し、再会後は強く接近や接触を求めものの、母親に抱かれても、なかなか機嫌がなおらず、母親に対してたたいり、けったり、押しやったりというような怒りを伴った反抗を激しく示す特徴がある。

B 群と C 群の差異は、母親に対する信頼感を獲得し、母親を安全の基地として使用しているかないかの違いである (Ainsworth et al., 1978)。

その後、Main & Solomon (1990) は、回避群・安定群・アンビバレント群の 3 類型では、通常の

調査対象者の約 15% が、またサンプルを問題のある乳幼児に限るとその多くが分類困難であることを指摘し、行動が組織化されておらずどこに行きたいのかわからないという特徴を示す D 群 (disorganized / disoriented) の存在を明らかにした。

現在は成人の愛着スタイルにおいても、3 類型では分類できない混合型の存在 (戸田・詫摩, 1988 ; 中尾・加藤, 2003) や 4 類型における概念の明瞭さ (中尾・加藤, 2003) が指摘されている。さらに Ainsworth et al. (1978) の先行研究との概念の一致から、研究の流れとしては 4 類型が主流となりつつある。成人愛着スタイルを 4 種類に類型化した研究としては、Bartholomew (1990) のものが存在する。この類型は、Bowlby (1973) による自己と他者に関する作業モデルを次元軸とし、自己観と他者観の 2 つの軸から構成されている。その内容は自己観および他者観がポジティブな安定型、他者観はポジティブだが自己観はネガティブなとられ型、自己観はポジティブだが他者観がネガティブな拒否型、自己観および他者観のどちらもネガティブな恐怖型の 4 つである。この他にも Feeney, Noller, & Roberts (2000) は愛着次元を“見捨てられ不安”と“親密さへの回避”の 2 つの軸から捉えた類型化を提唱している。この類型では、Bartholomew (1990) の提唱した自己観が“見捨てられ不安”に、他者観が“親密さへの回避”に対応するとしている (Feeney et al., 2000)。

恋愛と愛着

愛着と恋愛の関係に関する初期の代表的な研究は Hazan & Shaver (1987) によるものである。彼女らによれば、恋愛は、子供が養育者に対して持つ愛着といくつかの類似性を持つため、恋愛関係は愛着スタイルの一種としてみなすことができる。

たとえば、親密さの回避傾向が高い回避型は空港で恋人同士が別れる際においても、近接維持行動を示さないことなどが明らかにされている (Fraleigh & Shaver, 1998)。

愛着スタイルによる恋愛行動の差異は、近年同様の研究を行っている Rholes & Simpson (2004) においても示されている。その他、Doherty, Hatfield,

Thompson, & Choo (1994) や Mikulincer & Shaver (2007) によって青年期の愛着スタイルによる恋愛行動や態度の違いが研究されている。また国内でも、戸田・詫摩 (1988) や金政・大坊 (2003) が青年期の恋愛関係に愛着スタイルが関係することを示している。以上のように、先行研究において、愛着スタイルにより恋愛行動が異なるということが明らかにされつつある。

しかし、上述の研究において利用されている恋愛関係に関する尺度や、その尺度を利用した恋愛関係と愛着スタイルとの関係に関する研究には疑問点が存在する。

それは成人愛着スタイルが内的作業モデルを仮定しているのに対し、測定指標が特定の相手ありきの恋愛行動である点である。内的作業モデルの構成要素の1つとして挙げられる「愛着対象者の受容性や反応に関する期待」(Bowly, 1973) という部分に注目した研究が少ないという点である。特に「自分がどう働きかけて、どんな関係を築きたいか」という個人の期待に焦点をあてた尺度で恋愛への期待・態度と愛着との関係を検討した研究はさらに少ない。

しかし、前述したように、内的作業モデルが異なることで、そもそも求める対人関係の在り方も異なることが想定される (Feeney et al., 2000)。つまり内的作業モデルの構成要素である期待が行動を規定する可能性が示唆される。

内的作業モデルの差異が、それぞれの愛着スタイルによる差異を生み出していると考えられるならば、期待に規定されていると考えられる恋愛行動よりも、恋愛のイメージや期待そのものについて研究を行うことで、より愛着スタイルごとの対人関係のあり方が見いだされることが考えられる。

よって、愛着スタイルと恋愛への期待という部分の関係を検討することにより、愛着スタイルによって恋愛関係に求めるものが異なるということが明らかにできると考えた。これは、愛着スタイルの違いが青年期の対人関係に影響することを支持する上で意義のあることといえる。

本研究では、恋愛におけるイメージ・期待を反映するものとして恋愛に対するロマンチックさを

取り上げる。ここで取り上げるロマンチックとは恋愛におけるロマンチックな行動ではなく、恋愛におけるロマンチックを求める度合い、希求度に着目したものである。これが恋愛への期待を反映すると考えた。

まず、研究1において既存の恋愛尺度との関連から、ロマンチックの概念を整理し、ロマンチック希求尺度の作成を試みた。

2. 研究1

愛着との関係に関わらず、恋愛に関する先行研究では実際の恋愛状況を色濃く反映しやすいであろう恋愛行動を中心に置いたものや、特定の相手を想起させているものが多い。例えば Sternberg (1997) の Sternberg Triangular Love Scale や 松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) による LETS-2 は「恋人や好きな人もしくは、家族以外であなたにとってもっとも親しい異性」を想起させることを前提としているため、回答者が想起する対象は個人の現在の状態に依存する。また回答者の恋愛時の行動が研究対象となる場合、恋人がいない人を調査対象にしづらいという問題点がある。一方、具体的な恋愛行動ではなく、恋愛イメージ尺度 (金政, 2002) を用いて、内的作業モデルの構成要素の1つである「個人の持つ恋愛イメージ」を測定しようとした研究に金政・大坊 (2003) によるものがある。しかし彼らの研究においては「恋愛をしていると周りが見えなくなってしまう」など、恋愛イメージに関する項目にも関わらず、実際の恋愛行動も同時に測定していると考えられるため、特に恋愛に対するイメージに限定した尺度の作成も必要とされている。

以上の点を踏まえ、本研究では恋愛に対するイメージ、特にロマンチック希求に着目する。理由は以下の3つである。

まず1つ目には、金政・大坊 (2003) が指摘するように、愛着スタイルは内的作業モデルを一般他者への信念や期待という形で表出させ、それに基づいて対人関係や行動が形成される。しかし期待全てが行動に反映されるとは限らない。なぜな

らば実際の恋愛行動は、関係性への期待による行動がもちろん含まれるが、それと同時に現実の相手の性格やお金や生活の上での時間の制約などの物理的制限からくる行動も含まれ、純粋に愛着の作用を測定しづらい。その点希求であれば、純粋に相手の受容性や反応性への期待を測定するため、愛着スタイルによる違いがより一層明確になるといえる。ゆえに実際の恋愛行動だけでなく、具体的行動としては現れない、「恋愛や恋愛相手への期待=希求」という観点からの研究が必要とされている。

2つ目は、「希求」という側面に注目することで、調査対象者の現在の恋愛関係の有無にかかわらず研究可能となり、想起対象との関係性を統一でき、これにより純粋に愛着スタイルに基づく恋愛のあり方の違いを検討することが可能となる。

3つ目に、愛着と恋愛の関係を調べる際、先行研究は恋愛のポジティブな側面のみに着目していた。しかし愛着は、他者に対するポジティブ・ネガティブ両面の期待を形成するため、ネガティブな期待も測定する必要がある。そのため本研究では、恋愛においてもポジティブ・ネガティブの両側面をもつロマンチックという概念に着目することで、全ての人々の青年期の愛着の側面を明らかにすることとしたい。

ロマンチック

恋愛研究の中でも、恋愛におけるロマンチックさの研究を最初に行ったのは、Gross (1944) である。彼はロマンチックという概念を構成するものとして、「恋人たちの特徴」「求愛行動の過程」「結婚や社会的なものとの関係」「哲学的空想」の4つを挙げ、各10項目からなる計40項目の要素を提案している。Gross (1944) 以降も様々な研究者が、恋愛におけるロマンチックについて研究を行っている。たとえばRubin (1973) はロマンチックを「相手への情熱」と定義し、Knox & Sporkowski (1968) は友愛を含む夫婦愛と対になるものとして定義した。Critelli, Myers, & Loss (1986) は恋愛におけるロマンチック自体を定義してはいないが、愛情の構成要素に“身体

的覚醒 (physical arousal)”, “ロマンチックな一体感 (romantic-compatibility)”, “親密さの伝達 (communicative intimacy)”, “尊敬 (respect)”, “ロマンチックな依存性 (romantic-dependency)” の5つを挙げ、ロマンチックさは恋愛の要素の一部と考えていた。

Gross (1944) やRubin (1973) 等が検討してきたロマンチックの概念を比較すると、そこでの共通点として情熱的な希求を抱くことが挙げられる。またKnox & Sporkowski (1968) は、ロマンチックさとは相手の社会的地位に影響されないという非現実的な側面をもつことを指摘している。これらの特徴に加えて、和田 (1994) が作成した恋愛に対する態度尺度においては下位因子に「理想的な恋愛」という空想的な要素が含まれていることや、水野 (2007) の研究結果においては、LETS-2の「エロス」という恋愛における空想的な要素を反映した尺度において、恋をしている群の方がいない群よりも得点が高かったことから、現代の若者の恋愛をしている感覚に空想的であることが含まれると考えられる。加えて、「エロス」は男性の方が高く、「プラグマ」は女性の方が高いという、性差の存在が示されている。上記のことから、現代の若者の恋愛におけるロマンチックの概念に空想的であることが含まれると考えられる。

よって、本研究におけるロマンチックの操作的定義は、「非現実的で甘美な空想」であり、恋愛におけるロマンチックとは「非現実的で甘美な空想を恋愛に対して持つこと」である。すなわち、恋愛におけるロマンチック希求とは、「非現実的で甘美な空想を恋愛に対して持つことを望むこと」と定義できる。

以上の議論を受け、本研究で作成するロマンチック希求尺度の特徴を挙げる。先行研究において、松井ら (1990) のLETS-2のように恋愛タイプを分類するものやRubin (1973) の恋愛尺度など、従来の恋愛に関する尺度は特定の誰かを想定させた上で答えさせており、想定させた相手によって、回答が大きく異なっているという結果がでている (松井ら, 1990; 水野, 2007)。しかしこれらの先行研究の場合、想定させる特定の他者

として、恋人関係にあるものは恋人を、恋人関係にないものは「一番親密な異性」や「親」・「友人」を想起するよう求めているため、得られた回答の想起対象が恋人か親かという関係の種類の影響を受けたのか、その関係の親密度の差異の影響を受けたのか、いずれを反映しているのか不明瞭である。また、先行研究は恋愛対象として異性のみを想定しているため、同性愛者の存在を考慮に入れる必要がある。その点において、恋愛への期待としてのロマンチック希求の場合には、実際の対人関係、恋愛状況や、現在や過去に恋人がいた・いないということに制限を受けることなく、恋愛への期待を測定することが可能である。よって、現在の恋愛関係に関わらず、本人の理想の恋愛を訊くことにより、想起対象との関係を統一させることができると考えられる。

また、先行研究における多くのロマンチック尺度はロマンチックという概念のポジティブな側面のみに着目していたが、本研究ではMedora, Larson, Hortacsu, & Dave (2002)の観点にたち、ロマンチックのポジティブ面・ネガティブ面を共に考慮している。Medora et al. (2002)によれば、恋愛においてある程度のロマンチックさは関係維持の為には必要であるが、過度にロマンチックな期待をすることは、落胆・葛藤・関係崩壊等を招く恐れがあると、ロマンチックさの肯定的・否定的な両側面について示唆している。

以上の点に加えて、日本では共通の価値観や正直さといった内面的なものを重要視しており、性的な魅力を重要視していないという研究結果(山岡, 2003)を踏まえ、性的な項目は除くこととする。この点も、本研究で作成される尺度と既存のロマンチック尺度との違いとして挙げるべきであろう。

初めに予備調査において本尺度の因子構造を明らかにした上で、本調査において、ロマンチック希求尺度の妥当性の検討を行う。

2.1 予備調査

恋愛におけるロマンチック希求尺度の因子構造を明らかにする。

方法

調査対象者：都内にある大学3校に所属する大学生286名。その中で不備のあるデータを削除した結果、236名(男性86名・女性150名)を有効分析対象とした。平均年齢は20.22歳($SD=1.34$)であった。

調査日程：2009年10月31日から11月16日

調査場所：都内にある大学3校

調査方法：縁故法及び便乗法により質問紙の配布・回収を行った。

調査内容：本研究におけるロマンチックの定義に基づき、19項目を作成し、「(5)非常に当てはまる」から「(1)全く当てはまらない」までの5件法で調査を行った。その際、特定の相手が想起されることなく、恋愛への期待を測定可能であるよう「あなたの「私はこんな恋愛がしたい」というイメージに対して、下記の文がどのくらい当てはまるか答えてください。実現可能性は別にして、あなたの「こんな恋愛がしたい」というイメージに当てはまるか答えてください。」という教示文を示した。

結果

スクリープロットの結果から、2因子であると判断された。両因子には相互に関連があることが考えられたため、主因子法プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量.35以上の項目を抽出した。その結果、空想性からなる第1因子6項目、献身性からなる第2因子4項目の尺度構成となった(表1参照)。

2.2 本調査

本調査では予備調査で得られた因子構造の妥当性検証を行うことを目的とする。

まず、収束的妥当性を検討するために、尺度全体に対しては、恋愛に対する態度(和田, 1994)から恋愛至上主義因子と、空想性因子に対しては多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008)の想像性因子と、献身性因子に対しては同じ尺度の被影響性因子に加え、援助規範意識(箱井・高木, 1987)の自己犠牲規範意識因子との関係を検討

表1 恋愛におけるロマンチック希求尺度の因子負荷量と信頼性

	項目	因子負荷量	α 係数
因子1	1 情熱的な恋愛がしたい	.78	.80
	2 恋人といえる時はお互いトキメキを感じていたい	.74	
	3 恋人と愛し合っていることを実感したい	.61	
	4 この世に生まれてきたのは運命の人に出会うためだと思いたい	.59	
	5 恋人と一緒に月明かりの下を歩きたい	.55	
	6 恋愛を美しいものだと思いたい	.47	
因子2	7 他の人との約束があっても恋人に呼び出されたら駆けつけたい	.78	.76
	8 恋人のためなら何でもしたい	.63	
	9 恋人のスケジュールを最優先にして予定を組みたい	.62	
	10 恋人のことを私自身より優先して考えたい	.56	
	全体		.82

した。また、弁別的妥当性検討のために、尺度全体に対して価値志向性尺度（酒井・山口・久野，1998）の経済因子との関係を検討した。

次に、恋愛に対する態度尺度であるが、恋愛至上主義因子は、恋愛が至上のものであるという価値観を持つ傾向を表すものである。本尺度は、その構成概念として、恋人優先や恋愛優先を含むため、恋愛に最も価値があり、最優先項目であることを示す恋愛至上主義因子とは正の相関を示すと考えられる。

一方、価値志向性尺度における経済因子は、経済の価値を個人がどの程度志向し、体験しているかを示す尺度であり、実利的な傾向を示すものであるといえる。そのため、空想的傾向を含む第一因子、及び、恋人優先傾向を含む第二因子共に、負の相関を示すと予想される。しかしながら、恋愛における実利的傾向を扱っているわけではないことから、相関は弱いものであると予想できる。

また、援助規範意識尺度における自己犠牲規範意識因子は、自己犠牲を含む愛他的行動を指示する規範への意識を測るものである。そのため、構成概念に恋人優先という愛他的価値観の含まれる第二因子とは正の相関を示すことが予想される。しかしながら、第一因子においては、相互性希求という概念が含まれるため、負の相関が表れることが予想される。加えて、価値志向性尺度と同様に、恋愛に限定した尺度ではないため、相関はど

ちらも弱いものであることが予想できる。

方法

調査対象者：都内にある大学に所属する大学生237名。そのうち、質問項目に対する理解や文化差を考慮し、日本語を母語に持たない者や人生の半分以上を海外に滞在した者を分析対象から除いた。さらに、回答の欠損が目立ち、フェイスシートまたは質問紙に不備のあった者や、複数のページで同様の回答が続いたり、自身の得点を算出しながら回答したりと、歪んだ回答を行った回答者も分析対象とはしなかった。加えて、結婚前の恋愛に焦点を当てる為、結婚経験のあった者を除いた。以上の37名を除き、最終的に200名（男性63名・女性137名）を有効分析対象とした。平均年齢は19.57歳（ $SD=1.68$ ）であった。

調査日程：2010年4月9日から6月22日

調査場所：都内にある大学

調査方法：縁故法及び便乗法により質問紙の配布・回収を行った。

調査内容：質問紙には以下の4つを含めた。

a. 恋愛におけるロマンチック希求尺度

予備調査で作成した尺度である（表1参照）。5件法（非常に当てはまる＝5から、全く当てはまらない＝1まで）で使用した。

b. 多次元性共感性尺度の想像性因子・被影響性因子

鈴木・木野（2008）の多次元性共感性尺度より、非現実的な傾向を表す、想像性因子及び、他者からの影響の受けやすさを表す、被影響性因子を用いた。各因子5項目ずつ、全10項目の尺度である。

c. 恋愛に対する態度の恋愛至上主義因子

和田（1994）の恋愛に対する態度より、恋愛を至上のものとする恋愛至上主義因子11項目を用いた。

d. 援助規範意識の自己犠牲規範意識因子

箱井・高木（1987）の援助規範意識より、自己を犠牲にして相手に尽くす傾向を表す自己犠牲規範意識因子8項目を用いた。

e. 価値志向性尺度の経済因子

酒井・山口・久野（1998）の価値志向性尺度より、経済的志向を優先する傾向を表す経済因子12項目を用いた。

f. フェイスシート

7項目について問うた。項目は、調査対象者の年齢、学年、性別、母語、海外滞在経験の有無と滞在年数、現在の恋愛状況（交際している・片思い・どちらもしていない）、結婚経験の有無である。

結果

スクリープロットの結果から、2因子を抽出す

るのが適切だと判断した。因子間に相関関係が予想されたため、主因子法プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量.35以上の項目を抽出した。その結果、第1因子6項目、第2因子4項目の尺度構成となり（表2参照）、第1因子は空想性及び相互性希求に関して高い因子負荷量を示す項目から「相互性への空想的希求」因子と、第2因子は恋人のために何かをしたいという項目から構成されていることから「恋愛への献身希求」因子と名付けた。信頼性係数として、クロンバックの α 係数を算出した結果、 $\alpha = .83$ という高い内的整合性を示した。加えて、因子間では $r = .44$ ($p < .01$) の中程度の相関が見られた。

作成した尺度の各因子得点と、前述した妥当性検討のための尺度得点の間で、ピアソンの積率相関係数を求めた。尺度全体と恋愛至上主義因子との間では、 $r = .56$ ($p < .01$) の正のやや強い相関が見られ、経済因子との間では $r = .20$ ($p < .01$) の負の弱い相関が見られた。

第1因子と想像性因子との間では、 $r = .35$ ($p < .01$) の正の中程度の相関が、第2因子と被影響性因子との間には $r = .17$ ($p < .01$) の正の弱い相関が見られた。自己犠牲規範意識については、現在交際相手がいる者の第2因子得点との間に $r = .29$ ($p < .01$) の正のやや弱い相関が見られた。男

表2 恋愛におけるロマンチック希求尺度の因子負荷量と信頼性

項目	因子負荷量	α 係数	平均値 (SD)				
			男性 (n=63)	女性 (n=137)	恋人あり (n=66)	片思い (n=44)	なし (n=90)
1 情熱的な恋愛がしたい	.84						
2 恋人といる時はお互いドキメキを感じていたい	.68						
因子1 3 恋人と愛し合っていることを実感したい	.59	.80	21.11	21.05	21.68	21.95	20.32
4 この世に生まれてきたのは運命の人に会おうためだと思いたい	.57		(4.66)	(5.04)	(4.29)	(5.93)	(5.13)
5 恋人と一緒に月明かりの下を歩きたい	.54						
6 恋愛を美しいものだと思いたい	.53						
7 他の人との約束があっても恋人に呼び出されたら駆けつけたい	.78						
因子2 8 恋人のためなら何でもしたい	.71	.79	12.73	10.20	11.83	12.64	9.64
9 恋人のスケジュールを最優先にして予定を組みたい	.63		(3.82)	(3.91)	(3.93)	(4.38)	(3.66)
10 恋人のことを私自身より優先して考えたい	.63						
全体		.83	33.84 (7.44)	31.25 (7.47)	33.52 (6.97)	34.59 (8.92)	29.97 (7.29)

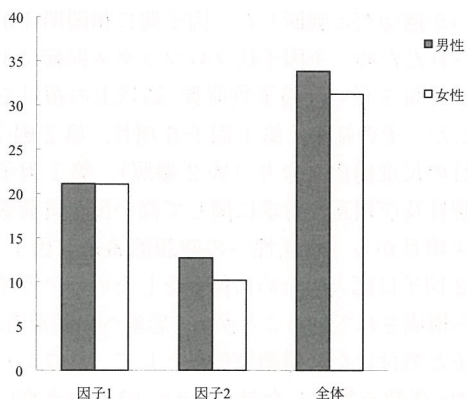


図1 恋愛におけるロマンチック希求度の男女別平均

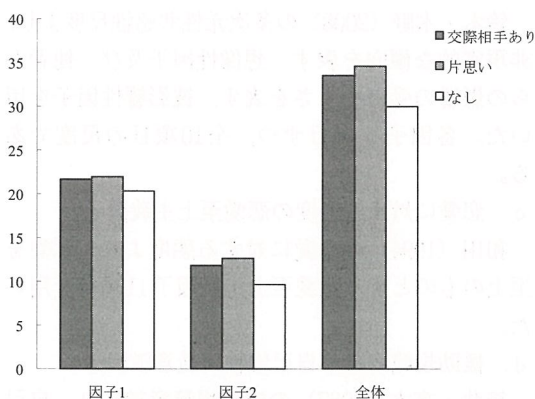


図2 恋愛におけるロマンチック希求度の恋愛状況別平均

女の比較を行ったところ、第2因子においてのみ、男性のロマンチック希求度が有意に高かった； $F(1,199) = 18.41, p < .01$ 。

恋愛状況と尺度全体との分散分析を行うと、恋愛状況間で差がみられた； $F(2,199) = 7.09, p < .01$ 。そこで、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、恋人・好意を抱く相手なし群は、交際相手あり群よりもロマンチック希求度が有意に低く ($p < .01$)、片思い群との比較においても有意に低かった ($p < .01$)。

第2因子との分散分析では、恋愛状況群間で差が見られた； $F(2,199) = 10.72, p < .01$ 。そこで、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、交際相手・好意を抱く相手なし群は交際相手あり群よりもロマンチック希求度が有意に低く ($p < .01$)、片思い群との比較においても有意に低かった ($p < .01$)。

考察

まず、収束的妥当性に関しては、尺度全体と恋愛至上主義因子の間で正のやや強い相関が見られたことから、想定した以上に本尺度が恋愛至上主義的側面を持っていると考えられる。また、第1因子と多次元共感性尺度との間では、想定通り、正の中程度の相関が見られたことから、本尺度に空想的概念が含まれることが支持されたといえる。第2因子と被影響性因子との間では、正の弱い相関が見られ、恋愛への献身が外部から受けた

ロマンチックに対するイメージの影響によらない可能性を示している。加えて、第2因子と自己犠牲規範意識尺度との間では、正のやや弱い相関が見られ、恋愛への献身が本人の意識として自己犠牲を伴いにくいものであることが考えられる。

次に、弁別的妥当性に関しては、尺度全体と経済因子との間に、負の弱い相関が見られ、恋愛において相手の社会的地位に捉われないというロマンチックの概念が反映されていることが支持された。

以上のように、一定の妥当性が示されており、信頼性についても、高いといえることができるが、今後もさらに、他の概念との関係を検討することで、本尺度を洗練させていく必要がある。

また、ロマンチック希求尺度得点にみられた男女差、恋愛状況における差異に関して考察する。男性の回答者数が女性に比べて少ないものの、ロマンチック希求の男女差においては、第2因子でのみ男性の方が高いという差が見られたことから、男性の方が恋愛への献身的意識を持ちやすいたことが考えられる。恋愛状況による差については、恋人・好意を抱く相手なし群よりも、恋人あり群及び片思い群の方がロマンチック希求度が高かったことから、恋人あり群及び片思い群において具体的な相手の想起が行われた可能性があると考えられる。恋愛への期待を反映するロマンチックという概念を自身と照らし合わせて評価する際、関心がある相手がいればそれを想起するのは自然な

ことかもしれない。しかし、本尺度の特徴のひとつである想起対象の質を統一する点を考慮するならば、今後の研究では「実現可能性は別」であることの強調を教示において徹底させる必要があるだろう。

3. 研究 2

本研究における第二の目的は、ロマンチック希求尺度を用いて恋愛における期待を測定し、「親密な対人関係体験尺度 (ECR) の一般他者版 (中尾・加藤, 2004)」で分類した青年期の愛着スタイルとの関係性を調べることである。

研究 2 における調査は、研究 1 の本調査と共に行われ、分析は両尺度の回答に不備がない回答者を対象に行われた。

Bartholomew (1990), Bartholomew & Horowitz (1991), Griffin & Bartholomew (1994) などの先行研究によって、4 類型に基づく各愛着スタイルの特徴は以下のように明らかにされている。

まず安心型 (secure) は、人を信頼し、人付き合いに好意的だが、自立的でしっかりしているので人から受け入れられなくても不安にならない。また、適応的な付き合い方ができるので、良好な関係を築きやすい。これは、愛着スタイルの 3 類型における安定型と対応関係にあるとされている。3 類型における安定型は、Hazan & Shaver (1987) によると、恋愛関係において友情を抱きやすいという。よって、安定型の恋愛は情熱的というよりも友愛のような穏やかなものであり、相手に過度な期待を抱くことはないと考えられる。また安定型は相手を信頼し、自分自身のことも好きであるという特徴を持っているため、第三者の存在にも不安になりにくく、排他的になりにくく考えられる。さらに Rholes & Simpson (2004) は、安定型は強迫的な世話行動を示さないと述べた。これは、安定型は相手や恋愛を全てだと信じこむことがなく、恋愛に没頭しすぎることがないためと考えられる。

次にとらわれ型 (preoccupied) は、人に対して好意的な一方、人から拒否され見捨てられる不安

を抱えており、親しくなることを過剰に望む。不安なあまり付き合いに関して過敏になり、ますます不安は増大する。多くの場合、誰かの助けなしでは自尊心や幸福感を得ることができないという。とらわれ型は、3 類型におけるアンビバレント型と対応関係にあるとされており、安定型のような穏やかで友情的な恋愛は、恋人関係の終わりであると考えするという (Hazan & Shaver, 1987)。また、見捨てられ不安から、過度な親密性を求め、親密になるということを最優先の目標とすることがわかっている (Rholes & Simpson, 2004)。しかし、Mikulincer & Shaver (2007) は、過度の親密性への欲求・見捨てられ不安は、恋愛相手への現実にとぐわぬ高い要求を生み出すと指摘している。具体的には、強迫的占有・調和への熱望・一目ぼれの傾向が安定型・回避型より強いこと (Hazan & Shaver, 1987) や、情熱的な愛情 (passionate love) を示す傾向が安定型・回避型より強いこと (Dhorety, Hatfield, Thompson, & Choo, 1994) が挙げられる。

3 番目に拒絶型 (dismissing) は、自分の能力や価値を確信しており、人を頼りにせず、距離を置いたり避けたりする傾向がある (Bartholomew & Horowitz, 1991)。

最後に恐れ型 (fearful) は、人から拒否されて傷つくのを恐れている。拒絶型と同様に、親しい付き合いを避ける傾向がある。恐れ型は、3 類型における回避型と対応関係にあるとされている (Bartholomew & Horowitz, 1991)。

Hazan & Shaver (1987) によると、回避型は、ロマンチックラブは続かないと思っている特徴がある。しかし Ainsworth et al. (1978) や金政 (2005) によれば、回避型は相手と親密になりたくない訳ではなく、親密さを求める欲求と裏切られるかもしれないという葛藤ゆえに、結果ストレス解消方略として回避という態度をとるとしている。

各愛着スタイルのロマンチック希求度の程度については、各スタイルの特徴および先行研究で明らかにされた恋愛行動の特徴から、以下のように予想した。

まず、回避欲求が低いほど近接維持行動をと

る (Fraley & Shaver, 1998) ことから、4 類型において親密性の回避傾向が弱いとされているとらわれ型・安定型は、恐れ型・拒絶型よりも近接維持行動をとることが考えられる。本尺度は、恋愛における近接維持行動欲求を表す項目を第一因子・第二因子共に多く含んでいるため、回避欲求が低いほどロマンチック希求度も高くなると考えられる。よって、恐れ型・拒絶型よりも、とらわれ型・安定型の方が、ロマンチック希求度が高いと予想される。

次に、拒絶型は他者との関わりを通して主観的安全感を得たいという欲求が恐れ型よりも低いこと (Bartholomew & Horowitz, 1991; 中尾・加藤, 2003)、及び、他者の反応に関わらず継続して相互作用を回避すること (中尾・加藤, 2003) から、ロマンチック希求度との関わりとして2つの可能性が考えられる。1つ目は、拒絶型はロマンチック希求尺度における相互作用を求める内容である第一因子の得点が、4 類型の中で最も低くなるのではないかということであり、2つ目として、同様に近接維持行動に関係した項目の得点も最も低くなるのではないかということである。従って、拒絶型は4 類型の中で最もロマンチック希求度が低いことが予想される。

また、Bartholomew & Horowitz (1991) によると、安定型は個人的な自立性を失うことなく、関係を維持することができることとされている。ここから、過剰に献身的で自立的でない態度が項目に多く含まれる第二因子において、とらわれ型よりもロマンチック希求尺度得点が低いと予想される。

以上のことから、本研究における仮説は以下のようなになる。

理論仮説

恋愛におけるロマンチック希求度は、とらわれ型、安定型、恐れ型、拒絶型の順に高い。

作業仮説

- 1) 親密性の回避得点が低い安定型・とらわれ型は、親密性の回避得点が高い拒絶型・恐れ型よりも恋愛におけるロマンチック希求度が高い。

- 2) 見捨てられ不安が高いとらわれ型は、見捨てられ不安が低い安定型よりも恋愛におけるロマンチック希求度が高い。

- 3) 見捨てられ不安が高い恐れ型は、見捨てられ不安が低い拒絶型よりも恋愛におけるロマンチック希求度が高い。

方法

調査対象者：都内にある大学の大学生237名。そこから、質問項目や日本文化を念頭においたロマンチックという言葉を十分に理解していない危険をはらむ、日本語を母語に持たない者や人生の半分以上を海外に滞在した者を分析対象から除いた。さらに、愛着尺度得点の欠損が目立ち、フェイスシートまたは質問紙に不備のあった者や、複数のページで同様の回答が続いたり、自身の得点を算出しながら回答したりと、歪んだ回答を行った回答者も分析対象とはしなかった。加えて、結婚前の恋愛に焦点を当てる為、結婚経験のあった者を除いた。以上の理由から計46名を除き、191名(男性60名・女性131名)を有効分析対象とした。平均年齢は19.50歳 ($SD=1.58$) であった。

調査日程：2010年4月9日から6月22日

調査場所：都内にある大学

調査方法：縁故法及び便乘法により質問紙の配布・回収を行った。

調査内容：以下の内容を含めた。

a. 恋愛におけるロマンチック希求尺度

研究1で作成した尺度である(表1参照)。5件法(非常に当てはまる=5から、全く当てはまらない=1まで)で使用した。

b. 親密な対人関係体験尺度 (ECR) の一般他者版

中尾・加藤(2004)による7件法(「1=全く当てはまらない」から「7=非常によく当てはまる」)全36項目からなる尺度である。分類はECRの見捨てられ不安得点・親密性の回避得点それぞれにおいて調査対象者全員の平均点(見捨てられ不安 $M=63.52$; 親密性の回避 $M=47.78$)を算出し、平均点を基準として、そこからの高低による組み合わせによって、調査対象者を4タイプに分類した(表3参照)。

c. その他

7項目について問うた。項目は、調査対象者の年齢、学年、性別、母語、海外滞在経験の有無と滞在年数、現在の恋愛状況（交際している・片思い・どちらもしていない）、結婚経験の有無である。

結果

表3から、恐れ型・とらわれ型・拒絶型・安定型の順に、ロマンチック希求度の得点が高いことが読み取れる。

また、分類された愛着スタイルを独立変数、ロマンチック希求得点を従属変数として一要因の被験者間分散分析を行ったところ、愛着スタイルの主効果は有意であった； $F(3,187) = 5.39, p < .01$ 。Bonferroni法による多重比較の結果、とらわれ型の方が安定型よりも ($p < .05$)、恐れ型の方が安定型よりも ($p < .01$) ロマンチック希求度が高いことが示された。

考察

愛着スタイル別のロマンチック希求度の違いを検討したところ、仮説2)、3)は支持されたが、仮説1)は支持されなかった。この結果を以下のように考察した。

とらわれ型と恐れ型は他の愛着スタイルに比べて高いロマンチック希求度得点を示した。両タイプは見捨てられ不安が強いため、信頼に足る理想的な相手を想定した場合には親密性への期待を抱くものと考えられる。親密性への期待を理想的な相手を想定するロマンチック希求が反映した結果であろう。

特に恐れ型については、親密性を求める欲求があるものの、人から拒否されて傷つくのをおそれて

いるために、実際の行動としては親密性を回避する傾向にあるとされる (Bartholomew & Horowitz, 1991)。恐れ型のように実際の行動レベルでは親密性を回避する傾向にあることが明らかにされているにも関わらず、本研究においては近接維持的希求を含むロマンチック希求度が最も高かったことから、恋愛における行動と希求は必ずしも一致しないという可能性がある。

次に、安定型のロマンチック希求が低くなった理由としては、元々親密性の回避が低いため、とらわれ型や恐れ型のように他者に極端に依存せず、相対的にロマンチック希求度が低くなったのではないかと考えられる。実際、Harzan & Saver (1987)によれば、安定型の恋愛の特徴として、相手との適切な関係を結ぶことや、相手を過度に理想化しないことが挙げられている。そのため、希求も現実に即した範囲での理想化を反映したものになり、ロマンチックさをあまり希求しなかったことが考えられる。

最後に、拒絶型は恐れ型と同様に親密性の回避が高いといわれている。その一方で、恐れ型とは異なり、自分の能力や価値を確信しているために人を頼りにせず、距離を置いたり避けたりする傾向にあるとされる (Bartholomew & Horowitz, 1991)。従って、想像上の理想的な他者であろうが、そもそも相手に対する期待が薄いため、ロマンチック希求度が高くならなかった可能性が挙げられる。

以上のように、見捨てられ不安が高い恐れ型・とらわれ型のロマンチック希求度は、見捨てられ不安が低い拒絶型・安定型より高かった。しかし親密性の回避が高群の拒絶型のロマンチック希求度よりも親密性の回避が低群のとらわれ型の方の

表3 各愛着スタイルの恋愛におけるロマンチック希求度の平均値と標準偏差

愛着スタイル	M	SD
安定型 (n = 52)	29.40	7.40
とらわれ型 (n = 31)	33.97	6.72
恐れ型 (n = 59)	34.39	7.10
拒絶型 (n = 49)	30.80	8.02
全体 (n = 191)	32.04	7.62

ロマンチック希求度が高かったことから、希求に関しては親密性の回避の影響よりも見捨てられ不安の影響が強い可能性が考えられる。つまり、他者に対する期待よりも、期待した他者に対して自己がそれにつりあう存在であるのかという自己評価が影響していることが示唆される。ゆえに青年期の恋愛を明らかにするためには、さらに自己評価との関係を検討する必要があるといえよう。

4. 全体考察

本研究で得られた知見として以下の2点が挙げられる。

まず1点目としては、研究1で明らかになった、恋愛におけるロマンチック希求度には男女差があるという点である。恋愛への献身性という概念を含む第2因子において、女性より男性の得点が高いという結果が得られたことから、女性より男性の方が恋愛への献身を求める傾向にあると考えられる。このことは、水野(2007)による研究からも支持される。水野(2007)は、献身的な愛である「アガペ」を、女性より男性が抱きやすいとし、実利的な愛である「プラグマ」は、女性が男性よりも抱きやすいとしている。この理由として水野(2007)は、男性は恋愛にのめり込みやすく、恋愛に対して理想主義的に考える傾向が強いことを挙げており、本研究においても同様の傾向が示されたといえる。

2点目としては、研究2で明らかになった、恋愛の実際の行動と希求は必ずしも一致しないという点である。恐れ型は近接維持行動を示さないことが明らかにされている(Fraley & Shaver, 1998)が、本研究の結果において、恐れ型は近接維持行動欲求を反映した多数の項目を含むロマンチック希求尺度の得点が他型よりも高かった。つまり、恐れ型が近接維持行動への希求を最も示していたといえる。Ainsworth et al. (1978)によれば、幼児期の回避行動は、親密性欲求と裏切られるかもしれないという恐れとの間の葛藤から引き起こされる。恐れ型が近接維持行動を示さない愛着スタイルであるにもかかわらず、ロマンチック

希求度は高いという結果は、実際は行動を起こしたいという欲求が希求尺度によって示された可能性がある。つまり、本研究の結果は、幼児期における恐れ型の親密性への回避行動が親密性への恐れと欲求との葛藤から引き起こされるという仮説(Ainsworth et al., 1978)と同様に、青年期にける実際の行動と欲求の乖離を示唆している。

最後に、恋愛行動と愛着についてであるが、見捨てられ不安の高い恐れ型及びとりわれ型のロマンチック希求度が、見捨てられ不安の低い拒絶型及び安定型よりも高かったことから、見捨てられ不安の違いが恋愛におけるロマンチック希求度の違いに影響していたといえる。青年期における見捨てられ不安と自己観は概念が対応関係にあるとされる(Freeney et al., 2000)。金政(2005)によれば、自己評価が低い場合、その自信のなさや関係への不安が、“相手に対して自己の感情を表出させなければ他者が離れてしまう”という恐れを抱かせ自身の感情を抑制することを避けさせる。そのため、過度に他者に対して依存的になる。対して、自己への評価が高い場合にはそのような懸念がなくなるため、相手に対して適切な対応を行えるとしている。このことから、青年期においては、自分が愛され、サポートされるに足る人間かという自己評価的な側面をもつ、愛着スタイルにおける自己観(Bartholomew & Horowitz, 1991)が、見捨てられ不安という観点以上に、恋愛において重要な意味を持っていることが考えられる。

今後の展望としては、青年期の愛着スタイルごとの違いを検討するために、恋愛における近接維持行動とその希求の両側面から同時に測定を行うことが望まれる。そして愛着スタイル、とりわけ自己観がどのように行動に反映されるかを検討することで、行動と希求との間に生まれる差異の原因を明確にしていく必要がある。それらが明確にされることによって、恋愛に限らず青年期の愛着スタイルが行動と希求に対してどう影響しているのか理解する助けとなるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. (1989). Attachments beyond infancy. *American Psychologist*, **44**, 709-716.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 安藤智子・遠藤利彦 (2005). 青年期・成人期のアタッチメント 遠藤利彦・数井みゆき (編) アタッチメント 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房 pp.127-143.
- Bartholomew, K. (1990) Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1991). 母子関係の理論Ⅰ—愛着行動— 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ—分離不安— 岩崎学術出版社)
- Collins, N. L., Guichard, A. C., Ford, M. B., & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment: New developments and emerging themes. In W. S. Rholes, & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press. pp. 196-239.
- Crittelli, J. W., Myers, E. J., & Loos, V. E. (1986). The components of love: Romantic attraction and sex role orientation. *Journal of Personality*, **54**, 354-370.
- Crowell, J. A., Fraley, R. C., & Shaver, P. P. (2008). Measurement of individual differences in adolescent and adult attachment. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* 2nd. (pp. 599-634). New York: Guilford Press.
- Doherty, R. W., Hatfield, E., Thompson, K., & Choo, P. (1994). Cultural and ethnic influences on love and attachment. *Personal Relationships*, **1**, 391-398.
- Feeney, J. A. (2008). Adult romantic attachment: Developments in the study of couple relationships. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* 2nd. (pp. 456-481). New York: Guilford Press.
- Feeney, J. A., Noller, P., & Roberts, N. (2000). Attachment and close relationships. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close Relationships* (pp.185-201). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (1998). Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.
- Gross, L. (1944). A belief pattern scale for measuring attitudes toward romanticism. *American Sociological Review*, **9**, 463-472.
- 箱井英寿・高木修 (1987). 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 社会心理学研究, **3**, 39-47.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 神菌紀幸・黒川正流・坂田桐子 (1996). 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **22**, 93-104.
- 金政祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から— 対人社会心理学研究, **2**, 93-101.
- 金政祐司 (2003). 成人愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは— 対人社会心理学研究, **3**, 73-84.
- 金政祐司 (2005). 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間概念的—一貫性についての検討— パーソナリティ心理学, **14**, 1-16.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **19**, 59-76.
- Knox, D. H., & Sporkowski, M. J. (1968). Attitudes of college students toward love. *Journal of Marriage and the Family*, **30**, 638-642.
- 松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短期大学紀要, **23**, 13-23.
- Main, M., & Goldwyn, R. (1988). *An adult attachment classification system*. Unpublished manuscript, University of California, Department of Psychology, Berkeley.
- Main, M., & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the Preschool Year: Theory, Research and Intervention*. (pp. 21-160). Chicago: University of Chicago Press.
- Medora, N. P., Larson, J. H., Hortacsu, N., & Dave, P. (2002). Perceived attitudes toward romanticism: A cross-cultural study of American, Asian-Indian, and

- Turkish young adults. *Journal of Comparative Family Studies*, **33**, 155-178.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in adulthood: Structure, dynamics, and change*. New York: Guilford Press.
- 水野邦夫 (2007). 恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究 — Leeの理論をもとに — 聖泉論叢, **14**, 35-52.
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか? — 4 カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と3 カテゴリー (多項目式) との対応性 — 九州大学心理学研究, **4**, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 中尾達馬・加藤和生 (2006). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか? パーソナリティ研究, **14**, 281-292.
- Reber, A. S., Allen, R., & Reber, E. S. (2009). *Attachment*. In *The Penguin Dictionary of Psychology* 4th ed. (pp. 69). London: Penguin.
- Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (2004). *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications*. New York: Guilford. (W. S. ロールズ & J. A. シンプソン 編 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメント: 理論・研究・臨床 北大路書房)
- Rubin, Z. (1973). *Liking and loving: An invitation to social psychology*. Oxford, England: Holt, Rinehart & Winston.
- 酒井恵子・山口陽弘・久野雅樹 (1998). 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討 — 項目反応理論の適用 — 教育心理学研究, **46**, 153-162.
- Solomon, J., & George, C. (2008). The measurement of attachment security and related constructs in infancy and early childhood. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* 2nd. (pp. 383-416). New York: Guilford Press.
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, **27**, 313-335.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成 — 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて — 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 戸田弘二・詫摩武俊 (1988). 愛着理論から見た青年の対人態度 — 成人愛着スタイル尺度作成の試み — 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 和田実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成実験社会心理学研究, **34**, 153-163.
- 山岡重行 (2003). 女性の恋愛スタイルと恋愛観・結婚観 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 118-119.

謝辞

本稿における研究1は、国際基督教大学2009年度フィールド研究法の一環として、伊地知あゆみ、中島大輔、菱谷彩、崇田亮太とともに実施した。共に学んだ仲間と諸先輩方に深く感謝する。

注

本稿は、第4執筆者の指導のもとで作成された。また、本研究の一部は第19回日本パーソナリティ心理学会、及び第22回日本発達心理学会において発表された。